音楽科で重点的に育成を図る資質・能力とその手だて

本多　春奈

好奇心 題材に向き合い、思いを表現しようとする

①子どもの心が動くような学習材と出合わせる

第２学年「いろいろな音やせんりつのうつりかわりを楽しもう」の題材では、鑑賞活動を通して楽器の音色、旋律の反復や変化に気付き、そのよさや面白さを感じ取りながら、音楽の構造をもとに情景を思い浮かべて聴くことをねらいとした。本題材で取り上げる鑑賞曲の「そりすべり」は、馬ぞりが雪の上を走る様子を表現しており、鈴の音やムチの音、馬のひづめの音やいななきなど、特徴的な音が随所に聴こえてくる楽曲である。

楽曲との出合いの場で子どもの興味・関心を引き出すために、導入はクイズ形式にした。曲の冒頭部分を聴き何の様子を表しているのか、そり、汽車、船、の３つの中から考えさせた。クイズ形式にしたことで、子どもは意欲的に楽曲に向き合い、音楽から答えを見つけようと集中して鑑賞をする姿が見られた。子どもの言葉からは、「鈴の音がサンタさんのそりみたい」、「途中で馬の足音のような音が聴こえる」など、音に注目して聴いていた様子がうかがえた。また、この楽曲は楽器の音色に特徴があることから、曲中に表れる音（スレイベル、ウッドブロック、スラップスティック、コルネット）に注目することで、そりすべりの様子を思い浮かべながら想像力豊かに鑑賞をすることができると考えた。それぞれの場面で聴こえてくる特徴的な音を繰り返し聴くことで、子どもは音に注目しながらそりが走る様子を思い浮かべ、想像力を働かせながら鑑賞をすることができた。

曲の構成はA−B−A−coda の３部形式となっており、各部分で特徴的な音が表れて楽曲のイメージを形づくっている。鑑賞をする際には、全体を一気に通して聴くのではなく、各部分に分けて聴き比べた。部分ごとに分けて聴くことで、旋律の雰囲気や音楽の仕組みをとらえやすくし、曲の流れを感じながら鑑賞活動に取り組むことができるようにした。子どもは次々に表れる新しい表現を意欲的に聴き取り、楽曲の特徴をつかむことができた。そして、特徴のある表現が聴こえてくる部分では、子どもの発言を取りあげるだけでなく音でも確認をすることで、気付きを全体で共有することができた（資料１）。

A児：途中からポコポコした音が聴こえてきて、馬が走っている感じがしました。 T　：みんな聴こえた？もう一回音で確認してみよう。 全体：Bの部分に入ったところで、馬が走っているみたいな音が聴こえたよ。何の楽器だろう。

資料１　聴こえてきた音についての発話

鑑賞活動のまとめには演奏されている楽器を実際に見て音を聴いたり、演奏動画を観たりする活動を行った。演奏の様子を観ることで、音だけでは分からない楽器の種類や演奏の仕方を確認することができた。また、生の楽器の音色を聴いたりすることで、音に対する興味や関心がさらに深まっていった。

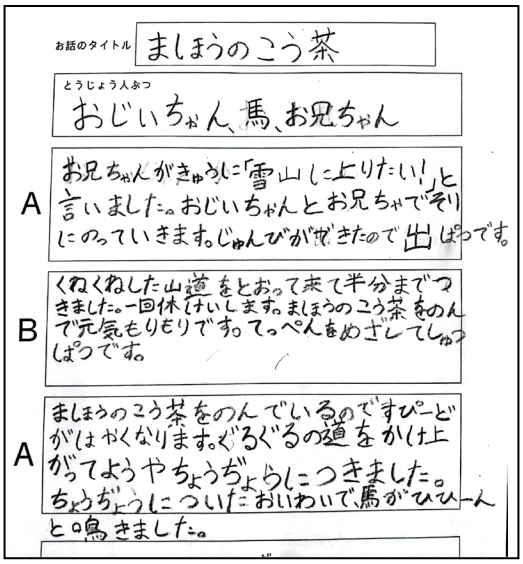
このように、子どもの興味関心を高めるような学習の導入や、実際の楽器の音を聴いたり、演奏の様子を映像でも鑑賞したりしたことは、子どもにとって意欲的に鑑賞活動に取り組むために効果的だったと考える。今後様々な楽曲に出あった際に、豊かに音楽に向き合うことができるようにするためには、表面的な音だけではなく、様々な楽器の音色や旋律の特徴、音楽の仕組みに気付くことが大切である。多くの視点で音楽を聴くことができるように、今後も鑑賞領域の題材構成を工夫していきたい。

②題材に没頭していく学習課題を設定する

第２学年「いろいろな音やせんりつのうつりかわりを楽しもう」の題材では、鑑賞活動を通して楽器の音色、旋律の反復や変化に気付き、そのよさや面白さを感じ取りながら、音楽の構造をもとに情景を思い浮かべて聴くことをねらいとした。

本題材で取り上げる「そりすべり」には、馬がそりを引きながら走る様子を表す音色がいくつも使われている。そりが走るイメージと楽器の音色や音楽を形づくる様々な要素とを結び付けながら意欲的に鑑賞活動を行うことができるように、楽曲を形づくっている音楽の仕組みや音色からお話を想像し、「そりすべり」のオリジナルの物語をつくることを学習のゴールに設定した。

この曲の、A-B-A’のそれぞれの場面は旋律やリズム、強弱などに特徴がある。まず、各場面を丁寧に鑑賞し、物語づくりの基となる旋律の動きや強弱、速さなどを確認した。子どもは、Aは元気で明るい感じ、Bは静かになって、少しゆったりした感じになる、といったように、AとBでは曲の感じが変わること、最初のAと戻ってきたA’では旋律は同じでも強弱やリズムが変化し、Aよりももっと賑やかで楽しい感じがするということに気付き、自分の物語を考える際の足掛かりとしていた（資料２）。


お話のタイトル　ましほうのこう茶

とうじょう人ぶつ　おじいちゃん、馬、お兄ちゃん

A　お兄ちゃんがきゅうに「雪山に上りたい！」と言いました。おじいちゃんとお兄ちゃんでそりにのっていきます。じゅんびができたので出ぱつです。

B　くねくねした山道をとおって来て半分までつきました。一回休けいします。ましほうのこう茶をのんで元気もりもりです。てっぺんをめざしてしゅっぱつです。

A　ましほうのこう茶をのんでいるのですぴーどがはやくなります。ぐるぐるの道をかけ上がってようやちょうぎょうにつきました。ちょうぎょうについたおいわいで馬がひひーんと鳴きました。

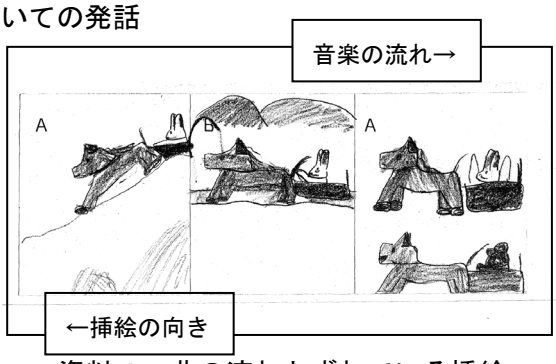
資料２　児童がつくった物語

物語をつくるという課題を設定したことで、ただ鑑賞して気付いたことを発言していくよりも、一つ一つの音の意味を大切に考えたり、物語の基となる音楽の仕組みを見つけたりする姿が見られた。そして、なぜこのような物語を考えたのか、音楽の仕組みをもとにして説明をすることができた（資料３）。

＜まほうのこう茶のお話＞
Ｔ　：どうしてＢの部分では魔法の紅茶を飲んで休憩しているの？
Ｂ児：Ｂは音楽がなめらかになって、休んでいる感じがしたから。魔法の紅茶を飲むのは、Ｂの次に出てくるＡは最初よりも音が大きくて盛り上がるから、紅茶を飲んでもっと元気が出た感じにしたかったから、このお話にしました。

資料３　物語の根拠についての発話

また、物語に合った挿絵を考えることでイメージをより膨らませ、想像豊かに鑑賞活動に取り組むことができた（資料４）。ただ、挿絵の描き方や絵の方向などの指示に課題が残った。音楽の進み方で挿絵の向きを考えたり、参考イラストの提示の仕方を工夫したりするなどの点で配慮が足りず、子どもの想像力をうまく広げることができなかったことが反省として挙げられる。



資料４　曲の流れとずれている挿絵

このように、音楽を基に物語をつくるというゴール設定は子どもにとって目的意識をもって鑑賞活動を行うことができたという点では成果が見られた。ただ、音とお話を結び付けることが難しい子どもの姿もあった。聴こえてきた音をどのようにして物語につなげていくのか、ヒントとなる手だてが必要であった。今後、音や音楽から文や絵につなげたりするなど、音楽科だけでなく国語科や図画工作科とも連携しながら、子どもの思いをより引き出していくための学びの進め方について考えていきたい。

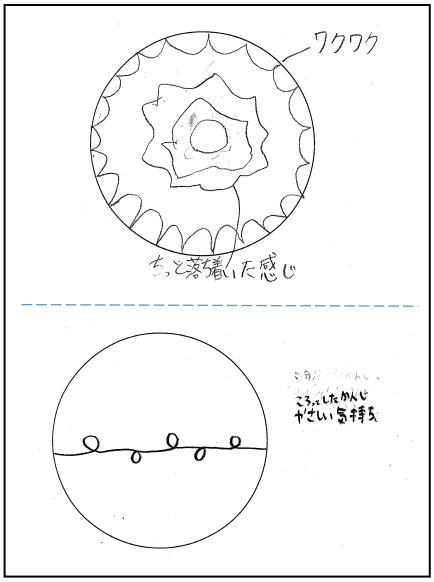
調整力 一人一人の思いや意図を表現につなげることができる

①グループワークシートを工夫する

第４学年「世界に伝わるいろいろなリズムや歌を楽しもう」の題材では、世界の国々に伝わる音楽を演奏したり鑑賞したりすることを通して、諸外国の歌やリズムがもつ様々な魅力を感じ取ることをねらいとした。

本時では、世界各国の音楽やリズムの面白さに気付かせるために、既習の「エーデルワイス」を取り上げ、３拍子、４ビートジャズ、ボサノバの３種類のリズムで演奏したものを鑑賞した。

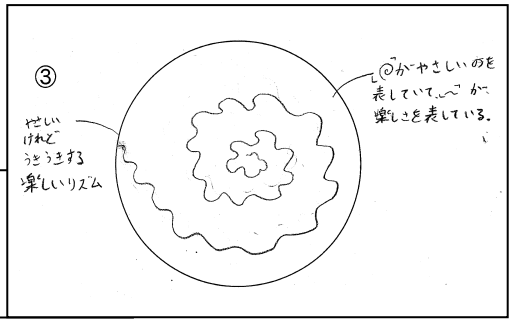
鑑賞のワークシートは、感じたことを言葉で表すものがよく用いられるが、この題材では言葉ではなく線を使って感じたことを表すワークシートを用いた。課題は＜どんな気持ちになるかな＞とし、３種類の音楽を聴いてどんな気持ちになったかを考え、その気持ちを表す感情の線をワークシートに描くこととした（資料５）。そして、どうしてその気持ちになったのかと問い返すことで、それぞれの曲がもつ音楽の要素に迫ることができるようにした。



資料５　気持ちを線で表現したワークシート

ワークシートを、記述ではなく線と言葉で表現する形にしたことで、「ワクワクした気持ちになるからギザギザ」「やさしい気持ちになるからころっとした感じの線」のように、自分が感じたことをより具体的に表現することができていた。子どものワークシートには思い思いの線で気持ちが表現してあり、全体交流の場では、どうしてこの線の形になったのか、楽曲を形づくる要素と絡めながら話をする様子が見られた（資料６）。

C児：線が丸くなっているのは、やさしい気持ちを表していて優しいだけじゃなくて、ウキウキした気持ちになるから波線にしました。



資料６　線の形についての発話とワークシート

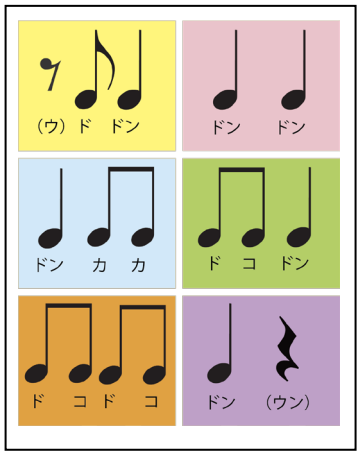
ただ、気持ちを表す言葉をうまく引き出すことができない場面もあり、課題が見られた。「楽しい気持ち」と書いている子どもが多く見られたが、「楽しい」という言葉の中には、様々な「楽しい」があり、子どもによって感じ方の違いがある。機会をとらえた問い返しができず、それぞれの思いに合った言葉をうまく引き出すことが難しい場面も見られた。楽しさは楽しさでも、どんな楽しさなのか、気持ちを表す言葉をさらに豊かにしていくことで、子どもの表現の幅がさらに広がり、音楽を聴いた時の表現の豊かさにもつながっていくと考える。

聴いたこと、感じたことをどのように表していくのか、子どもの発達段階や楽曲の特徴に合った表現方法等を考慮しながら、どの子どもも自分が感じたことを自由に表現することができるワークシートの形を追求していきたい。

②音を聴き合う場を設定し、様々な表現方法に気付かせる

第２学年「おまつりの音楽」の題材では、「村まつり」の歌唱や「日本のたいこ」の鑑賞、「たいこのリズム」による音楽づくりを通して、お祭りや太鼓などの日本の伝統的な音楽に親しむことをねらいとした。

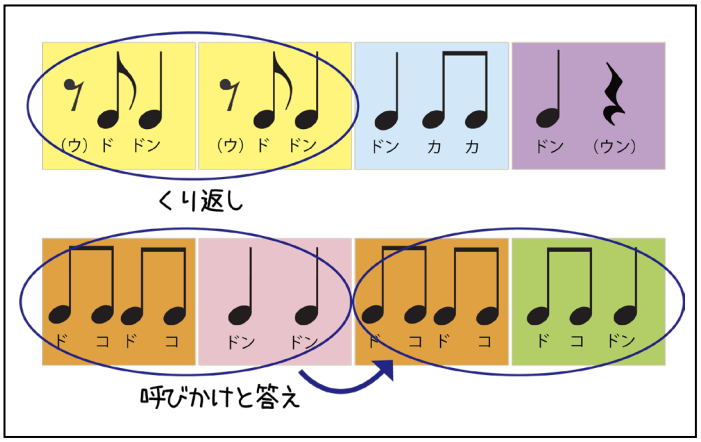
本時の音楽づくりでは、６種類のたいこのリズム（資料７）を自由に組み合わせ、２拍子４小節のオリジナルのたいこのリズムをつくる学習に取り組んだ。リズムカードは色分けをすることで、視覚的にもリズムの組み合わせが分かるようにした。子どもは思い思いに自分の好きなリズムを組み合わせ、オリジナルのたいこリズムをつくることができた。



資料７　たいこのリズム

考えを更新し、新しい価値に気付かせるために、リズムづくりの活動の途中で、全体交流の場を設定した。子どもの発想からは、４枚とも別のリズムを組み合わせたもの、同じリズムを２枚使ったもの、同じ２枚のリズムの順番を工夫したもの、始まる感じと終わる感じを意識したものなど、様々なリズムの選び方や組み合わせ方が見られた。

子どもの考えたリズムの中から、〔共通事項〕の「くり返し」と「呼びかけと答え」を用いたものを全体に示し（資料８）、組み合わせ方の工夫について問うた。発言からは、「同じリズムが出てくると、まとまった感じがする。」「リズムをくり返すとお祭りの音楽みたいになる。」など、音楽の仕組みをつかうよさに気付く発言があった。ペアやグループで、つくったリズムを聴き合う場を設定し友だちの考えにふれたことで、自分が気付かなかったリズムの組み合わせのよさにも気付くことができた。例えば、終わりに休符のあるリズムを用いることで終わった感じになることや、楽しいたいこのイメージに合わせて弾んだリズムを使うなどの工夫である。この活動を通して様々なリズムの組み合わせを聴き合ったり、気付いたことを価値づけたりすることで、工夫の観点を広げることができた。そして、その後の活動では友だちの考えを試してみたり、新しい組み合わせ方を試してみたりする姿が見られた。また、前時に「日本のたいこ」の鑑賞活動を行っていたこともあり、お祭りの音楽にでてくる「合いの手」を試す様子が見られるなど、提示された情報の中から自分の音楽に生かしていきたいものを選び、試す姿も見られた。



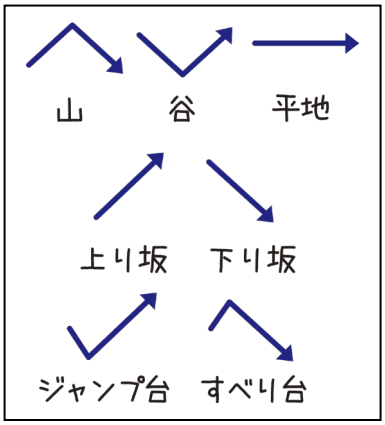
資料８　リズムの組み合わせ

このように、お互いの考えや音を聴き合う場をもったり、実際の音楽にふれ、そのよさに気付いたりすることで、子どもの考えや思いが更新され、「もっと～したい！」のように意欲的に音や音楽に向き合う姿につながっていったと考える。今後は思いや意図を大切にした音楽表現の土台を育てるために、考えを更新していく場の工夫について、音楽づくりだけではなく、器楽や歌唱表現、鑑賞領域でも様々なアプローチの仕方を考えていきたい。そして、各領域の往還を大切にした題材構成について研究を進めていきたい。

情報を収集・整理・分析する力 思いや意図に合った音をデザインすることができる

①多様な表現を手掛かりにして、感じ取ったことや思い浮かべたことを意識させる

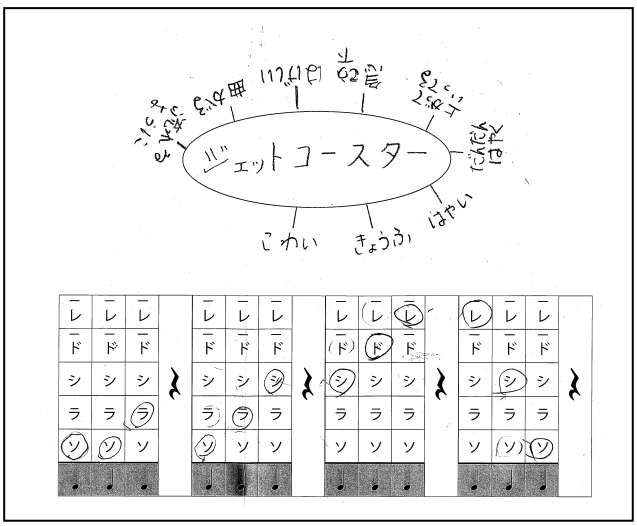
第４学年「音の動き方を生かしてせんりつをつくろう」の題材では、即興的に表現する活動を通して、音楽づくりの発想を得たり、音やフレーズのつなげ方の特徴に気付きながら旋律を表現する技能を身に付けたりすることをねらいとする。本時では、様々な音の動き方や音のつなぎ方を試し、自分たちのイメージした遊園地の乗り物を表現する音楽をつくることをねらいとした。

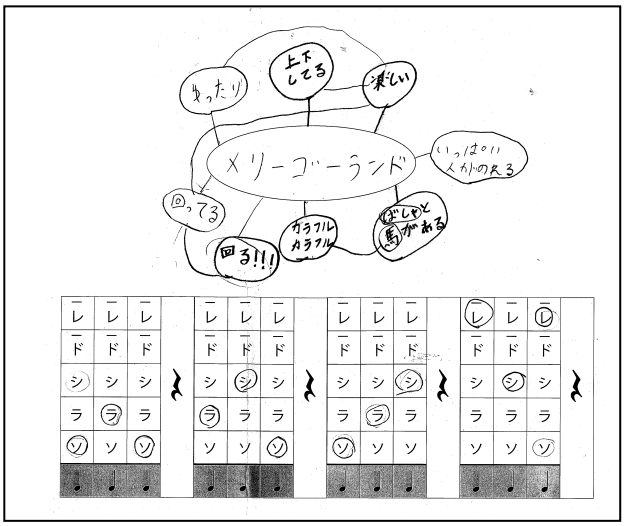


資料９　音の動きとネーミング

まず、音の動きについて意識化させるために、授業の導入ではリコーターによる「３音まねっこ」を取り入れた。教師が提示する様々な動きの３音を繰り返し演奏することで、いろいろな音の動き方を意識して演奏をすることができた。そして、それぞれの音の動きに名前をつけることで、音の動きに対する意識付けをすることができた（資料９）。

次に、乗り物のイメージと音の動きとを結び付けるために、乗り物のイメージを広げる時間をもった。子どもはグループで話し合い、「メリーゴーランドはゆったり回る」「ジェットコースターは上がったり下がったりする」など、乗り物のイメージをまとめた。そして、音をつなげる際には、乗り物の動き方を考えながら音の動き方を考える様子が見られた。ジェットコースターを取り上げたグループは高い音に向かって上がり、急降下する音型、メリーゴーランドは馬が上下するような山の形で音をつなぐなど、それぞれのグループでイメージに合った音のつなぎ方を試す姿が見られた（資料 10）。





資料 10　乗り物のイメージと音の動き方

様々な音の動き方を全体で共有したことで、自分たちのイメージに合った音の動きを試し、思いや意図に合った音楽をつくる姿がみられた。また、音の動きだけでなく、４分音符や８分音符など音価も工夫することで、よりイメージに合った音楽に迫ることができた。

このように、表現方法の引き出しを増やし、音楽のテーマを決めたことで思いや意図をもった音楽づくりにつながり、必要感を持ちながら音に向き合うことができたと考える。今後も子どもが意欲的に取り組むことができるような学習課題を考え、自分の思いや意図を音楽で表現することができるようにしていきたい。

②音、映像、言葉などの多様な表現を提示し、必要な情報を選択させる

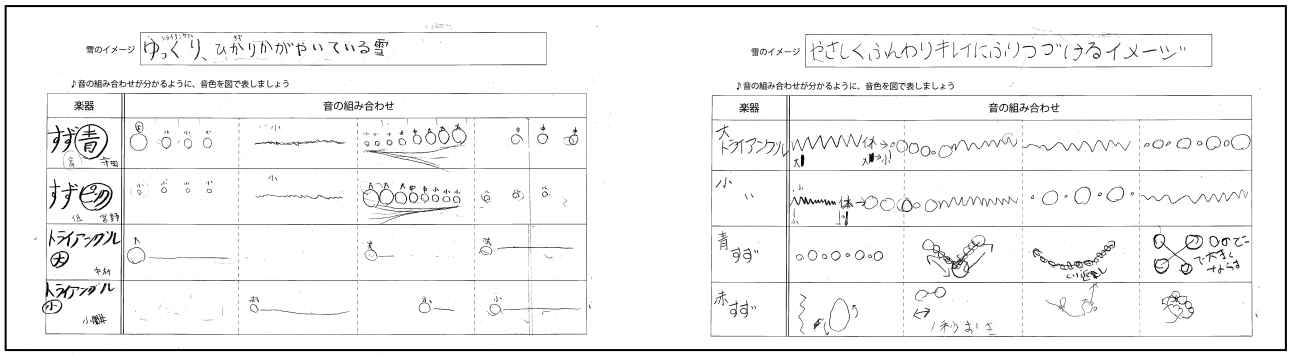
第３学年の「曲の感じをとらえて歌おう」の題材では、旋律やフレーズの特徴から曲想を捉え、曲想に合った歌い方を工夫したり、曲に合った伴奏を考えて、よりイメージに合った演奏を工夫したりする学習活動を行う。楽曲は歌唱曲「雪のおどり」を取り上げ、雪が降る様子をどのような声で表現すればよいか、また、雪が降る様子を聴く人に伝えるためにはどのような前奏をつけるといいのか、歌唱と音楽づくりを往還しながら、思いや意図に合った表現に迫ることをねらいとした。「雪のおどり」は歌詞で雪が降る様子を表現しており、「こんこん」と「ずんずん」というオノマトペで雪の様子を表している。加えて、カノン形式で歌うことにより、雪が降り続ける様子が歌声から伝わってくる楽曲となっている。

今回は歌だけではなく、前奏に雪の音楽を加えることで、より雪のイメージが伝わるような表現を目指した。その際には子どもの雪のイメージを広げるために様々な雪の写真や画像を提示し（資料 11）、「キラキラ光る雪」「しんしんと降り積もる雪」のように、雪のイメージを言葉で明確にし、音さがしへとつなげられるようにした。

資料 11　雪のイメージ画像の例

雪のイメージをグループで確認してからは音楽づくりに取り組んだ。音楽づくりは、「音さがし」→「音の重ね方の工夫」の順番で行い、音の高さの違う２種類のトライアングルと鈴を用いて、自分たちのイメージに合わせて楽器の鳴らし方や音の重ね方を工夫した。２種類の楽器でも、音の違うものを用いたことで様々な音の組み合わせが可能になり、「ゆっくりひかりかがやいている雪」のイメージは、トライアングルの響く音と鈴を細かく鳴らす音で表現したり、ふんわり降る様子は鈴を上下左右に動かしながら細かく鳴らしたりするなど、思い思いに音を試す様子が見られた。

今回はつくった音を楽譜に表すことが難しいと考え、図形楽譜を使って示すことにした（資料 12）。



資料 12　雪のイメージと図形楽譜

図形で記譜をすることで、考えた音を自由に楽譜に表すことができ、多様な表現にもつながっていった。また、音や音楽を全体交流で伝える際にも、図形楽譜は音をそのまま形にしたものであることから、「シャラシャラと鈴を鳴らすから、細かいギザギザな形」のように、自分たちの思いや意図を表しやすく、考えを伝える際に有効であった。

このように、写真や画像からイメージを膨らませて音づくりに取り組んだり、考えた音を言葉や図で表したりしたことは、子どもの豊かな発想を引き出す上で効果的であった。図形楽譜については、音楽づくりだけでなく鑑賞活動で感情線を用いて表現したり、色を工夫したりするなど、これからも工夫の余地が見られる。今後も様々な表現方法を通して思いや意図を音や音楽につなげられるよう、楽曲へのアプローチを考えたり、子どもの発達段階を考慮したりしながら多様な表現方法を追求していきたい。